

『萬葉集』五十九番「流らふるつま吹く風の寒き夜に

我が背の君はひとりか寝らむ」考

河上志貴子

はじめに

『萬葉集』卷一・五十九番は、大宝二年（七〇二）の冬十月十日より翌月二十五日にかけて、持統天皇が三河国方面に行幸した際（一）、（二） 誉謝女王（三）が詠じた歌と見なされる。通説では、作者はこのとき、遠方に離れていたと見られる夫の身の上を案じて、風の寒い夜に我が夫は独りで寝ているのであろうかと詠んだものと解される。（四）

誉謝女王の作る歌

ながらふるつまくぜのさむきよにわがせのきみはひとりかぬらひ
流 經妻吹風之寒 夜尔吾勢能君者独 香宿良武

歌の本文及び訓に関しては、古写本には特に異同は見られない。しかしながら、五十九番の解釈は従来の諸注釈書の間では一致していない。殊に初句「ながらふる」

と二句目の「妻」との係わりが難解とされ、現在に至っても定説を見ない。次に、従来の諸説の代表的なものを挙げることにする。

①妻説。「妻」を原文通りに、配偶者の意の「妻」に解し、「ながらふる」は、その人物が長く時を過ごす、また、生きながらえるとの意に解する。『萬葉抄』（宗祇）、『萬葉集全註釋』（武田祐吉）、等。

②衣説。「妻」を衣の棲の意に解し、「ながらふる」は、その棲の長く延びているような状態を表す語として扱う。『萬葉集管見』（下河邊長流）、『萬葉代匠記』（契沖）、『萬葉集考』（賀茂眞淵）、等。

③雪説。「妻」を「雪」の誤字とし、「ながらふる」は、その雪の流れて降る意に解する。『萬葉考概落葉』（荒木田久老）、『萬葉集略解』（加藤千蔭）、『萬葉集古義』（鹿持雅澄）、『萬葉集注釋』（澤瀉久孝）、

等。

④風説。②衣説と同様に、「妻」を衣の襟の意に解するが、「ながらふる」は「風」に掛かるものと見て、衣の襟を吹き流す風、もしくは長く引き続いて吹く風と解釈する。『萬葉集攷證』（岸本由豆腐）、『萬葉集講義』（山田孝雄）、『萬葉集精考』（菊池壽人）、等。

⑤妄説。「妻」を「妾」の誤字と考え、「ながらふる妾」は、長く待ち続ける私という意味に解する。「ながらふる」の解釈に関しては、①妻説と類似している。

新日本古典文学大系。

これらを見て分かるように、難解とされてきた上二句の中でも、殊に二句目の「妻」の意味、また場合によってはその表記自体がしばしば問われてきたため、以上のように数多の説が生じたわけである。一方、「流経」の表記・訓については、共にほとんど問題とされていない割には、その解釈もまちまちである。「ながらふる」の解明がそれだけ困難であるということの裏付けと思われるが、これは、多くの注釈書で、「ながらふる」と「妻」とが一括して解釈されてきた結果とも見なせる。五十九番の上二句、そして、一首としての意味を解き明かすためには、初句「ながらふる」の用法を、より個別的に見極める必要があるであろう。

本稿では、従来立てられてきた諸説を再検討しながら、初句「ながらふる」の意味・機能を明らかにした上で、五十九番の解釈を試みたいと思う。

一

集中における「ながらふ」の用例は、五十九番を含めて六例数えられる。

a 駿河采女の歌一首

沫雪かはだれに降ると見るまでに流なが倍散るは何の花なそも
(巻八・春雑歌・一四二〇)

b 大伴田村大嬢、妹坂上さかのう大嬢に与ふる歌一首
沫雪の消ぬべきものを今までに流経ながは妹に逢はむとそ
(同・冬相聞・一六六一)

c 雉鳴く高田の辺に桜花散りて流経なが見む人もがも
(巻十・春雑歌・「詠花」・一八六六)

d 天霧らひ降り来る雪の消なめども君に逢はむと流経なが渡る
(同・冬相聞・「寄雪」・二三四五)

e 世間の無常を悲しぶる歌一首 并せて短歌(四)

天地の遠き初めよ世の中は常なきものと語り継ぎ
奈我良倍来れ天あめの原振り放け見れば照る月も

満ち欠けしけり…(巻十九・大伴家持・四一六〇)
萬葉時代には、「ながらふ」に複数の用法があったこ

とはこれらの用例から読み取れる。『時代別国語大辞典 上代編』は、「ながらふ」の定義に関して、「流ル（なが）に動詞語尾のフがついた語か（な）」とし、

① 雨・風・花などが降り落ちる。

② 時間が経過する。また特に生命の続くことをいう

(10)。

といった二通りの用法があるとする。

そして、『萬葉集』における「ながらふ」の例のうち、一四二〇（a）と一八六六（c）は、古語辞典類・諸注釈書では、右の①の用法として扱われ、一六六二（b）、二三四五（d）と四一六〇（e）は②の用法として扱われるのが通常である。

まず、①の二例 a と c に窺われる「ながらふ」の用法を確認しておきたい。a は通説では、「沫雪がうつすらと降り積もるかと思えるほどに、しきりに流れて散るのは何の花であろうか。」というように解釈される。即ち、散り落ちてくる花を、まだらに流れて降る沫雪に見立てて詠んだ歌である。そして、もう一首の c は、四句切れとして、「雉の鳴く高円のあたりに、桜の花が流れるように散り続けている。誰かに見せたいものだ。」と解釈し得る。この二首に用いられている「ながらふ」を「流れるように降り続ける」という意味に解して大過はないだろう。

次に②の例 b と d における「ながらふ」の用法も確認しておきたい。b は、大伴田村大嬢が、妹の坂上大嬢に贈った歌であり、「自分の命は沫雪のように消えてしまいうようなのに、今まで生きながらえてきたのは、あなたに逢おうと思うからなのです。」などと諸注釈書は解している。「ながらへぬるは」という語句は作者自身の行為を言うものであり、「生き続けてきた」という意味に取れ、a・c の用法と異なることは明らかである。d は、b と同じく、冬の相聞歌である上に、「雪の消なめども」「君に逢はむと」といった表現の面からも類似していると言える。d は作者不明の歌であるため、b との先後関係については断言しかねるが、b の作者大伴田村大嬢が第四期（（4））に活躍した歌人であることから、d に倣って b を詠じたとも考えられる。いずれにせよ、b と d に用いられている「ながらふ」は、時間の経過に関連して「生き続ける」「生きながらえる」という意味を表していると思なせよう。

巻十九・四一六〇（e）は、世の中の無常に対する憂いを述べた家持の長歌である。「ながらへ来れ」に関しては、諸注釈書はほぼ一致して「言い伝えてきている」「言い継いできている」というように解している。この用法は、動詞「流る」の「時間が経過する。またその経過に従って伝えられる場合にもいう（な）」という一用法

と関連を持つものと考えられる。集中に「妹が名は千代に流れむ姫島の小松がうれに苔生すまでに」（巻二・挽歌・二二八）という歌が見られる。これは、和銅四年に、河辺宮人が姫島の松原で、ある乙女の屍を見て悲しんで作った歌であるが、姫島の小松の梢に、苔が生える程の後世までも、その乙女の名が伝わるだろうと詠んでいると見られる。

以上 a、e の例に見られる「ながらふ」の用法をまとめて述べるとすれば、次の通りになる。

- ① 花や雪などが流れるように降り続ける意。a、c。
- ② 時間が経過するにつれて、人命や言い伝えなどが長続きする、持続する意。b、d、e。

さて、問題は、五十九番における「ながらふる」の用法が、以上の用法のうち、いずれにより近いものであるかということである。ここで、諸説を再検討しながら、この考察に掛かりたいと思う。

二

先述した諸説の中で、①妻説を最初に打ち立てたと見なされる宗祇は、『萬葉抄』に、作者誉謝女王が夫と「わかれて程をへぬれはなからふる妻とよめる歎。」と述べている。管見の限り、宗祇の活躍後、二十世紀半ば

に至るまで、この説に従った注釈書は見られず、戦後になつて武田祐吉氏の『萬葉集全註釋』に顧みられるようになる。氏は「ながらふる妻」に関して、「この世に生き永らへてゐる妻」というように捉え、「待ちあぐねてゐる情を寫してゐると見られるのである。」と述べている。

しかし、この説明に対して、澤瀉久孝氏は「按ずるに、『妻』の文字をそのまゝに解するといふ事は望ましい態度には違ひないが（中略）妻に風が吹くといふのも苦しく、その妻を作者自身とし「この世に生き永らへてゐる」といふのも苦しい。」と述べている。「妻吹く風」という表現の妥当性に関しては、「小菅ろの末吹く風の」（巻十四・三五六四）、「我がやどのいささ群竹吹く風の」（巻十九・四二九一）などの例は見えるが、「妻吹く風」は『萬葉集』中、五十九番の他には見出せない。しかし、人物が風に吹かれるということが集中の歌に全く詠まれていないわけでもない。

f 妹に恋ひ寝ねぬ朝に吹く風は妹にし触れば我にも触れこそ

（巻十一・二八五八）

遠方にいる恋人と逢えない作者は、せめて共有できるものでもあればと思い、「妹に風が触れるのならば、自分にも触れておくれ」という願いを込めて詠んでいるのである。このように、離れている男女が、あるものを媒介

にして共感するという発想は五十九番にも容易に見出されよう。

なお、五十九番の「つま吹く風」という句は、藤原定家など、鎌倉以降の歌人等に採用された表現である。例えば、定家の『拾遺愚草』には、五十九番を本歌取りしたと思われる次の歌が見られる。

g 寒夜千鳥

浦千鳥かたもさだめずこひて鳴くつま吹く風の夜ぞ

ひさしき 二四

(上巻・「詠百首和歌」)

無論、右に見える「つま」は、『萬葉集』などにも例の多い、鳥獣のつがいと呼び交わすときに「つま呼ぶ」^きなどと表現される「つま」である。とは言え、これはやはり夫婦間で慣用語として使われていた「つま」を、鳥獣における「つま」に転用したものと見なせよう。

「妻吹く風」という表現の妥当性に関しては、集中中に例を見ないとは言え、その意味を把握するに当たっては不都合はないと思う。

むしろ問題となってくるのは、作者が「妻」を自称として用いることがあり得たかどうかである。集中の「つま」の例を調べれば、一般的に第一人称として用いられているのは「われ」であり、女性が「つま」を自称として用いている例は見出せない。

新日本古典文学大系は、「妻」を「妾」の誤字と見な

し、「ながらふる妾」と訓む説(⑤)を試案している^き。その語注に指摘されているように、「君」に対して「妾」が用いられている例としては、「紅の裾引く道を中に置きて妾や通はむ君か来まさむ」(巻十一・問答歌・二六五五)が見える。また、「君が名も妾名も立たば惜しみこそ富士の高嶺の燃えつつも居れ」(同・二六九七或歌)にあるように、「妾」を「わが」と訓む例もある^き。なお、巻九・一七二七では、「妻」と「妾」の二字をめぐる異同が実際に諸本に見られることから^き、五十九番の場合も、「妾」を「妻」と誤写した可能性は認められよう^き。

ここで、本稿で扱う「ながらふる」の問題に戻り、「生き永らへてある妻」(①妻説)、「長く待ち続ける我」(⑤妾説)の説くように、「ながらふる」が「妻」もしくは「妾」に直接掛かるものと見なすのが的確であるかどうかを検討してみたい。先述したように、集中の「ながらふる」の例のうち、諸注釈書、古語辞典類において、一貫して「生きながらえる」という意味に解され得る例は、一六六二(b)と二三四五(d)の二首のみである。では、五十九番をこの二例と比較した場合、何らかの相違点は見受けられるであろうか。まずは、bとdの二首には、意志を表す助動詞「ム」を含む表現が用いられていることに気づく。「妹に逢はむと」「君に逢はむと」といった表

現に、作者が愛しい人に逢おうと思う意向が顕著に表されている。また、これらの表現はそれぞれ、「ながらへぬるは」「ながらへ渡る」の理由として詠み込まれているものでもある。しかし、こうした作者の意志、また、その生きながらえる理由は、五十九番には表されていない。その上、bとdでは、作者が生きながらえるということ、雪がたやすく消え失せることと対照しているところに、この二首の趣旨が置かれているように思う。現実には人命は沫雪のようにほかないものであるのに、作者が何としてでも生き延びようと思う姿勢を浮き彫りにしているわけである。

bとdは共に、五十九番より後に詠まれた歌と推定でき^{二二〇}、この二首の「ながらふ」の用法は、平安以降数多くの歌に現れるようになる「生きながらえる」という用法と類似していると言えよう。ここでは、そうした例のごく一部を挙げてみる。

h逢ふことをながらの橋のながらへて恋ひわたるまに
年ぞへにける

（『古今和歌集』・恋歌五・坂上是則・八二六）

i 題しらず

ながらへば人の心も見るべきに露の命ぞ悲かりける

（『後撰和歌集』・恋五・よみ人知らず・八九四）

j 例ならずおはしまして、位など去らんとおぼし

めしける頃、月の明かりけるを御覧じて
心にもあらでうき世にながらへば恋しかるべき夜
はの月かな

（『後拾遺和歌集』・雜一・三条院・八六〇）

是則の歌hは、「逢うことも無く、長柄の橋が時を経るように、生きながらえて恋い慕い続けているうちに、年月ばかりが経ってしまったことです。」と解される。

ここでは、同音反復で、古い物の代表的景物とされる「長柄の橋」を以て、作者の「生きながらえる」行為を示す「ながらへて」を導いている^{二二一}。『後撰和歌集』の歌iでは、作者は、「生きながらえるならば、あなたのお心がいつまでも同じであるかどうかを見ることができのに、露のようにほかない我が命が悲しいことでありますよ。」と、現実には生きながらえることを望めないやるせなさを詠んでいる。人命を、消えやすいことから「露」に譬えているという点においては、bの「沫雪の消ぬべきものを」、また、dの「雪の消なめども」が、命のはかなさを連想させているのと類似している。そしてjは、三条天皇が眼病を煩われた上に、藤原道長に退位を迫られ讓位を決意されたときの御製である。一首は「思いの外に、この憂き世に生きながらえていたならば、きつと今夜の月が恋しく思い出されることであろうなあ」と解釈できる。

問題は、この *h* *j* に見られる「生きながらえる」の用法を、どこまで遡らせることができるかである。右の例と比較した上で、*b* と *d* の「ながらふ」を同様に「生きながらえる」の意に取るのは認められるであろう。しかし、必ずしも、五十九番の「ながらふる」にまで、同じ「生きながらえる」という意味を求められるとは言えないように思う。

五十九番の「ながらふる」がなぜ「生きながらえる」という意味に解されるようになったかを問えば、以上見てきた *h* *j* のような例に影響されたことをまず推定できよう。三条院の歌 *j* は、『百人一首』にも撰入され、その寂寥たる趣は、同集に見える藤原清輔の「ながらへば又此比やしのばれんうしと見しよぞいまは悲しき」にも見受けられる。これらは定家の好みに叶った歌とも想像し得るが、少なくとも、鎌倉時代には「生きながらえる」という意味が既に「ながらふ」に定着していたことは間違いないだろう。今日でも、「永らえる」という語は、「生きて長くこの世に居る」（岩波国語辞典・第五版）の意味で使われる。先入観によつてつい、五十九番の「ながらふる妻」を「生きながらえている妻」と解してしまう恐れはなきにしもあらずで、注意を要するところであろう。

では次に、②衣説を見て行きたい。『萬葉集管見』に

よれば「衣裳のつまは、すそになかれて、なかくあれば、かくいふ也。」とあり、次いで契沖は、「なからふるは、ななきなり。妻はよるのものゝつまなり。論語郷黨篇にも、必有寝衣一長一身有半」とあることく、よるのものは、ななきものなれば、つまもすそになひきてあるを、なからふるつま」というのであるとする。眞淵もこの説に従い、「流経」の「流は借字にて長ら経るなり、寝衣のすその長きをいふ」と解している。様々な観点から、衣の袂をいう「つま」と「ながらふる」を結び付けようとしているが、ここで問題が生じる。まず、「妻」と表記されている五十九番の「つま」を、衣の袂と解釈する根拠は、これらの説明には示されていない。なお、この解釈が成り立つには、どうしても「衣」の意味を補つて解釈しなければならないということもこの説の難点である。そもそも、遠方の夫に対する妻の気遣いを主題とする五十九番のような歌に、衣の袂をさす「つま」を詠み込んで、その形態を描写する必要があるのだろうかということが疑問である。

衣説に反論して雪説を提唱した久老は、「古へ衣に、裾袖襟などは、歌にもよみたれど、妻をよめる事なし。と述べているが、実は、衣の袂をいう「つま」は、既に古今時代の和歌に詠み込まれていた。在原業平の作「唐衣着つゝなれにしつましあればはるぐきぬる旅を

しぞおもふ^(二九)」(『古今和歌集』・羈旅歌・四一〇)をその例として挙げられる^(三〇)。そして、鎌倉中期の『宝治百首』には、五十九番を本歌取りしたと見なせる次の歌が現れる。

旅ごろもつま吹く風の寒き夜に袖をりかへし幾夜か
もねん^(三一) (「旅宿」・藤原成実・三八一六)

ここでは、「旅ごろも」「つま」「袖」「をりかへし」と縁語関係の言葉が集中している。本歌にはない「旅ごろも」を詠み込み、「つま」の上に位置づけていることによって、その縁語的效果が発揮されている。こうした修辭法を生かして歌の趣旨を表すということは作者の狙いでもあったと考えられる。

「つま」が衣の袂の意味で和歌に詠み込まれていたことは、以上の例によって明らかにしたが、問題は五十九番の「つま」を同様に衣の袂の意に解することができるかどうかである。右の業平と成実の歌には、「唐衣」「旅ごろも」という語が明記されている上に、先述したように、成実の歌^kでは、「つま」は「旅ごろも」「袖」「をりかへし」と縁語関係にある。こうした衣服に関する縁語による技巧は、業平の歌にも窺われる^(三二)。即ち、業平と成実の例では、このような修辭法が用いられているために、衣の袂であるということがより一層明らかになるわけである。

しかし、五十九番には、衣服と関連付けられる語は「つま」以外にはない。にも拘わらず、長流、契沖、眞淵等は「妻」を衣の袂の意に解したのである。その理由を問えば、以上見てきた中古以降の歌——特に成実の歌^k——

——などに影響された結果、五十九番の「妻」を同様に解したのではないかと考えられる。ただ、そこで問題として生じるのは、「つま吹く風」の句はそのまま成実の歌に取り入れられてはいるものの、本歌の「ながらふる」は詠み込まれていないことである。即ち、長流、契沖、眞淵等は、衣の袂の用法を五十九番の「妻」に当てはめ、一首を解き明かそうとしたが、「ながらふる」との関係を解明する糸口が成実の歌などには求められなかったために、衣の袂の形態と結び付けようとしたのではないかと察せられる。なお、近年では、中西進氏は、「日も長く経った旅衣の端に吹く風も寒い夜を、わが夫は一人で寝ているのだろうか。」^(三三)と解釈しており、まさに成実の「旅ごろもつま吹く風」の用法を、本歌の五十九番の解釈に応用しているかのように見える。時間が長く経過するという意味の「ながらふる」を「旅衣」と結び付けることによって、「ながらふる」と「つま」の繋がりが形成されるわけである。しかし、ここでも「旅衣」という語を補った上で、そうした解釈が成立し得るわけである。

では、衣説に反して、「妻」を「雪」の誤字^(三二)と見た久老の③雪説^(三三)について、その当否を検討してみたい。

まず、「ながらふる雪吹く風」に関しては、新日本古典文学大系は、「流らふる雪」を「吹く風」という表現は、回りくどく煩わしい。^(三四)と述べている。確かに、雪を「ながらふ」または「流る」と描写し、なお且つ風に吹き付けられるということを表している例は、『萬葉集』には見出せない^(三五)。

のみならず、雪説に従った注釈書の間でも、「ながらふる雪吹く風」の捉え方は異なっている。久老は「ながらふる」の意味について、「雪の降をいふ^(三六)」と解しており、鹿持雅澄(『萬葉集古義』も、「(前略)流は、^(三七)零ことなり、さて流を伸て流經といへるは、絶ず引つゞきて、長に零ことなり、^(三八)」と述べている。一方、澤瀉氏は、「チラチラと流れ散る雪^(四〇)」と訳している。更に、菊池壽人氏(『萬葉集精考』)は、最終的にはこの雪説には従わないが、その注に、「雪吹風」は即ちふぶきで、^(四二)「(傍点著者)あると説明している。「絶ず引つゞきて、長に零^(四三)」雪、「チラチラと流れ散る」雪、また「吹雪」とは、同じ「ながらふる雪」であるはずなのに、その捉え方は一致していない。

衣の棲、雪、いずれにしても五十九番における「なが

らふる」との係わりが今一つ釈然としない。それもあつてのことであろうが、衣説と雪説が打ち出された後、更に新しい説が現れた。④風説である。岸本由豆流(『萬葉集攷證』)は、「ながらふるつま」を「衣のつまなどの、風にふきながさるゝ^(四四)」という意味に解されるとし、即ち、「ながらふる」は、動詞「流る」に基づくものとして「風」に掛かっていると見なしたわけである^(四五)。後に、菊池壽人氏(『萬葉集精考』)、また、山田孝雄氏(『萬葉集講義』)もこの説に従った。うち、後者は「ながらふ」について、「ナガル」は動詞としてその物體の流動のあとの長く引き續きて見ゆるをいふ(中略)ここは引き續きて吹く風の作用をいへること疑ひなし。^(四六)と述べている。

ところが、風、嵐などを「ながらふ」または「流る」と表現した例は『萬葉集』には見られない^(四七)。その上、「風」を「吹く」、「ながらふ」という二つの語で描写するのは、限られた語数で表現する作歌上の態度として能率的とは思えない^(四八)。「ながらふ」を「吹く風」と結び付けるに当たって、やはり疑問が残る。

五十九番上二句の解釈は、妻説、妾説、衣説、雪説、風説のように大きく分かれてもいれば、各説の中で異見が窺われる場合もある。「流らふるつま吹く風」が如何に難解であるかを証している結果であろうが、同時に、

幾多の意味にも受け取れそうな「ながらふる」、「つま」、両者の語意における幅広い性格を裏付けているようにも思う。更に、「ながらふる」と「つま」を合わせて考えるという方法によって、五十九番の解釈が進められてきた傾向が見て取れる。殊に、久老の雪説以来、二句目の「妻」の解釈を、いわば要にして、上二句の全体の解釈が試みられてきたようである。しかし、ある一首のうち二つ以上不定の表現（ $\times$ と $\times$ とする）を、それらの位置する範囲内だけで論じた場合、 $\times$ も $\times$ も依然として解明されないという結果にもなりかねない。となれば、「流らふるつま」から一步離れ、「寒き夜」「ひとりか寝らむ」などといった、解釈の定まった語句にも目を向ける必要がある。これらの表現は相似した形で他の歌にも見られ、五十九番と比較する上では重要な資料と思われる。しかしながら、従来の諸説では、こうした類例との比較は重視されていない。

従って、これより本稿後半では、そうした類例との比較に焦点を当てて、五十九番の解釈を改めて試みたい。

三

五十九番をもう一度眺めてみよう。

流らふるつま吹く風の寒き夜に我が背の君はひとり

か寝らむ

結論から言えば、「ながらふる」は、「つま吹く風の寒き夜」という語句の全体に掛かっており、そうした夜の、幾夜も長く続く状態を表しているのではないかと考えたい。厳密に言えば、「ながらふる」は、第三句の「夜」を修飾していることになる。動詞「ながらふ」の「時間が経過する」という基本的な意味を、そのまま「ながらふる」+「夜」に当てはめれば、五十九番は無理なく解釈できると思われる。「幾夜も長く続く、妻に吹く風の寒い夜に、我が夫は独りで寝ているのであろうか。」というように、一首はあるがままに受け止められるわけである。

ただし、一見して、「ながらふる」が第二句を隔てて、三句目の「夜」を修飾するという点に関しては、いささかぎこちない感じがし、無理があるのではないかという疑問を招くかも知れない。しかしながら、調査した結果、「我が持てる三つあひに搓れる糸もちて付けてましもの今そ悔やしき」（巻四・相聞・阿倍女郎・五一六）という例も『萬葉集』に実在している。三句目の「糸」は、二句目「三つあひに搓れる」に直接修飾されており、なお且つ初句「我が持てる」にも修飾されているわけである。一首は、「私が持っている三本より合わせた丈夫な糸で紐を付けておけば良かったのに、今となつては悔

しいことです。」と解釈できる。

また、当該歌の上の句を「幾夜も長く続く…夜」と解した場合には、結句に見える、いわゆる現在推量の助動詞「らむ」は、文法上実際に用い得るものであるうか、といった疑念が生じるかも知れない。確かに、集中の「らむ」使用歌を見ると、「名張の山を今日か越ゆらむ」（巻一・四三）、「今は鳴くらむうぐひすの声」（巻十七・三九一五）などが示すように、「らむ」は現在の事態と結び付けられて推量を表す場合が多い（（四））。こうした例に照らせば、当該歌の「らむ」も、「…妻に吹く風の寒い夜（Ⅱ今夜）に、我が夫は今頃（Ⅲ）は独りで寝ているのであるうか」というように、当夜が占める時間的範囲に限る推量と見なすのが穏当かも知れない。しかし、次のようにも考えられないだろうか。作者が夫の独り寝を推量して、五十九番を詠んだ当夜は、「幾夜も長く続く…夜」の中に含まれている、ある一夜として考えれば、「らむ」の現在推量性に反することにはならないだろう。即ち、作者は、「今夜、いや、そればかりでなく、昨夜も、一昨夜も、旅立ってから、幾夜も続けて、夫は独りで寝ていることであるうか」という想いで、五十九番を詠んだものと考えられる。現に、『萬葉集』の他の用例を見ると、必ずしも、「らむ」は、「今」「今日」「今夜」のような、限定された時間的範囲のみに関連して、推量を

表しているとは言えないようである。巻十四の「うちひさつ宮の瀬川のかほ花の恋ひてか寝らむ昨夜も今夜も」（三五〇五）をその一例として挙げられる。「（愛しい相手）が」貌花のように恋ひ慕って寝ていることであろうか」という作者の推量は、現在推量でありながらも、「今夜」という時間的範囲を越えており、明らかに「昨夜」に及んでいる推量でもある（（五））。

さて、作者嘗謝女王は、序的な上の句を以て、五十九番の舞台背景を設定している。そして、下の句では、一首の主旨を示していると言えるであろう。この二つの部分を結合させているのは、第三句の「夜」に他ならない。即ち、五十九番の「夜」は、

（イ）「吹く風の寒き夜」と詠まれているところから、

風の寒い晩であり、また、

（ロ）「我が背の君はひとりか寝らむ」とあるところから、作者が夫の独り寝を想像している夜でもある。

前にも述べたように、「吹く風の寒き夜」「ひとりか寝らむ」といった語句の解釈に関しては、諸説の間では相違はほとんど見られない。即ち、（イ）と（ロ）は、五十九番の最も動かし難い点と言って良いだろう。

男女の別離を主題とした歌においては、独り寝の夜、または、風が寒い夜を詠んだ他の例を調査してみると、

次の歌のように、そうした夜が幾夜も長く継続するものとして描かれていることに気づく。

―せむすべの たづきを知らに 岩が根の こころしき道
を 石床の 根延へる 門を 朝には 出で居て嘆き
夕には 入り居て偲ひ 白たへの 我が衣手を 折り
返し ひとりし寝れば ぬばたまの 黒髪敷きて 人の
寝る 甘睡は寝ずて 大舟の ゆくらゆくらに 思ひつ
つ 我が寝る夜らを 数みもあへむかも

(巻十三・相聞歌・三二七四)

また、右に伴う反歌は次の通りである。

ひとり寝る夜を数へむと思へども恋の繁きに心ど
もなし

(同・三二七五)

長歌に見られる「数みもあへむかも」の「よむ」は、声を出して数えるという意味であり(五〇)、歌の末尾は「私が寝る夜は数え切れようか(いや、その数が多すぎるのでとても数え切れないでしょう)」と解釈できる。そして反歌の方でも、「ひとり寝る夜を数へむ」とあるように、作者の過ごす独り寝の夜は数夜に渡り長く続いているものと見受けられる。

次の長歌も、右と同じく巻十三の相聞歌である。現実には、夫とは逢えないが、せめて夢にだけでも、何夜も続けて夫に逢うと見えて欲しいという妻の切実な想いを描いている。反歌も併せて挙げておく。

m 我が背子は 待てど来まさず 天の原 振り放け見れば
ぬばたまの 夜もふけにけり さ夜ふけて あらし
の吹けば 立ち待てる 我が衣手に 降る雪は 凍り渡りぬ
今更に 君来まさめや さな葛 後も逢はむと
慰むる 心を持ちて ま袖もち 床打ち 払ひ 現には
君には逢はず 夢にだに 逢ふと見えこそ 天の足り
夜を

(同・三二八〇)

衣手にあらしの吹きて寒き夜を君来まさずはひとり
かも寝む

(同・三二八一)

今更に恋ふとも君に逢はめやも寝る夜を落ちず夢に
見えこそ

(同・三二八三)

長歌の結句「天の足り夜を」については、日本古典文学全集は、「天は、果てもなく長いことのたとえ。足り夜は、足り具わった夜の意で、夜をほめていった。」と説明しており、「幾夜も続けて」と解釈している。妻が幾ら待っても夫の訪れはない。そして、「さな葛 後も逢はむと 慰むる 心を持ちて」とあるように、妻は一旦希望を持ち直そうとするが、後日の逢う瀬でさえ不可能であることを予知している故に、せめて夢にだけでも、幾夜も続けて夫に逢うと見えて欲しいと願うわけである。反歌(三二八三)の「寝る夜を落ちず夢に見えこそ」は、まさにその想いを簡潔に表現していると言つて良いだろう。

また、言うまでもないが、これら長歌・反歌には、「あらしの吹けば」「あらしの吹きて寒き夜」「ひとりかも寝む」といった、五十九番の「吹く風の寒き夜」「ひとりか寝らむ」と類似した表現が用いられている。

次の歌は、文武天皇の吉野行幸に関連して詠まれたものである。「吉野の山から吹き下ろす風が寒いのに、もしや今夜も私は独りで寝るのであろうか」といった作者の懸念する様子が窺われる。

n 大行天皇（五三）、吉野宮に幸す時の歌

み吉野の山のあらしの寒けくにはたや今夜も我がひとり寝む

右の一首、或は云ふ、天皇の御製歌

（巻一・雑歌・七四）

表現方法の上で、右の「あらしの寒けく」「我がひとり寝む」は、五十九番の「吹く風の寒き夜」「ひとりか寝らむ」と相似している。のみならず、この歌が行幸の際に詠じられたという点においても、五十九番と共通している。なお言えば、文武天皇の吉野行幸は、大宝元年もしくはその翌年に行われたと見られ、即ち、五十九番の詠まれた時期とほぼ重なる。描写方法上の相似に留まらず、歌の歴史的背景の上でも両者は似通っているわけである。

以上の例のように、男女の別離は、一日一夜程度では

なく、何日にも渡るものとして描かれることが多い。

愛しい相手と別れ、独り寝の夜を迎える。そうした夜は次の晩に連なり、その晩は更に次の夜へと続く。空虚な夜が連続し、果てのないほどの長さに感じられるわけである。五十九番が長旅に関連して詠まれたことから考えると、作者も、その夫も、別離していた間一貫して孤独な夜を毎晩過ごしていたことは容易に想像できる。

そして、男女が逢う瀬の夜を迎えることになったときは、今度は、夜は束の間のように感じ、できることならば、幾夜も長く続いて欲しいと願う。

次の相聞では、作者金村は、旅中、ある乙女を得た際に、別離している妻と共に夜を過ごす思いで、願わくは、その夜が百夜分の長さであつて欲しいと詠んでいる。

○ 二年乙丑の春三月、三香原の離宮に幸せる時に、

娘子を得て作る歌一首并せて短歌

三香の原 旅の宿りに 玉梓の道の行き逢ひに 天雲の外のみ見つ 言問はむ よしのなければ 心のみむせつつあるに 天地の 神言寄せて きたへの衣手かへて 自妻と頼める今夜 秋の夜の 百夜の

長さありこせぬかも（巻四・笠朝臣金村・五四六）

また、男女の情を色濃く示している右のような相聞と、内容上類似点の多い七夕の歌が、百三十余首『萬葉集』に見られる。その中には、萬葉人が、一年に一度の逢う

瀬しか許されぬという彦星と織女星の伝説に、己が情を託して詠んでいる歌が見られる。

p月重ね我が思ふ妹に逢へる夜は今し七夜を継ぎこせぬかも
(巻十・秋雑歌・二〇五七)

右の傍線部分は、先に挙げた金村の「…自妻と頼める今夜 秋の夜の 百夜の長さありこせぬかも」と類似しているところである。また、このpと同じく巻十の「七夕」歌群に収められている次の歌にも注目したい。

q天地と別れし時ゆ ひさかたの 天つしるしと定め
てし 天の川原にあらたまの月重なりて 妹に逢ふ
時さもらふと 立ち待つに 我が衣手に 秋風の吹
き反らへば 立ちて居て たどきを知らに むら肝の
心いさよひ 解き衣の 思ひ乱れて いつしかと 我が
待つ今夜 この川の 流れの長くありこせぬかも
(同・二〇九二)

「いつになつたら(その夜が来るのであらう)」と、私が待った今宵は、この天の川の絶え間なく流れ続けるように、長く続いてくれないものか」と作者は願う。まさに、oとpの発想・表現方法と相似している例である。

愛しい相手と逢える夜は束の間に過ぎず、逢えない夜は幾夜も連綿と長く続く。上代の男女にとつて、逢う瀬は、夜の時間帯に限られていた。そうした貴重な時間の経過を常に意識し、敏感に受け止めていたことは容易に

見て取れるであらう。

とすれば、誓謝女王も、時間の経過を意識した観点から、五十九番の「夜」の在り方を描こうとしたと想定し得る。先述したように、右に挙げた1、mとnは、表現方法の上で——例えば、「ひとりし寝れば」(1・長歌)、「あらしの吹きて寒き夜」「ひとりかも寝む」(m・反歌・三二八二)、「あらしの寒けくに」「ひとり寝む」(n)など——五十九番と似通っている。また、文武天皇の行幸の際に詠まれたnは、作歌事情における共通点を有する例でもある。これらの歌には、「我が寝る夜らを数み」(1・長歌)、「ひとり寝る夜を数へむと」(1・反歌)、「天の足り夜」(m・長歌)、「寝る夜を落ちず」(m・反歌・三二八三)などと、独り寝の夜が幾夜も長く継続するという意味が込められている。従つて、五十九番の「夜」も、これらの例と同様に、幾夜も長く続くものとして描写されたものと取るのは、決して不自然には思えない。

現に、第二節で述べたように、中西氏は②衣説を採つてはいるものの、「日も長く経つた旅衣の端に…」と解釈している。また、「この世に生き永らへてゐる妻」(①妻説)、「長く待ち続ける我」(⑤妾説)においても、やはり、女王と夫の別離が何日も何夜も続いたという理解に基づいて立てられた説と見られる^{五七〇}。時代は降るが、

平安中期に成立したと思われる『うつほ物語』には、貴宮の求婚者の一人である行正宛に、宮あこ君が貴宮の代わりに次の返歌を詠んでいる。

あひもみぬ日のながらふる袖よりは人の涙のおちぬ
べきかな （五五）
（嵯峨院）

平安以降になると、「生きながらえる」という意味の「ながらふ」が圧倒的に多く用いられるようになることは既に述べた。しかし、希な例とは言え、右の「日のながらふる」によつて、まだ平安時代には、時間の経過を表すという「ながらふ」が残存していたと見なせるのではないだろうか。となれば、「ながらふ」の用法は、そうした時間の経過を示す用法から、次第に、「生きながらえる」という用法に変遷して行つたと考えられるであろう。

四

さて、誉謝女王は、「ながらふる」という表現を以て、「夜」の幾夜も長く、続く、という意味を表したのではなからうかと想定してきたわけであるが、なぜ「流経」という表記を用いたのかを考察する必要がある。まず、前にも述べたように、「流経」の「経」は継続を示す助動詞「フ （五五）」と解されており、「長く続く」における継続性はこの解釈によつて問題なく説明され得る。「流」

に關しては、動詞「流る」の意に解する見方（③雪説、澤瀉氏解釈）もあれば、「長」の借字と解釈する見解（②衣説、眞淵解釈）もある。また、「流る」「長し」、両方の意味を求める妥協的な解釈（④風説、山田氏解釈）も見られる。五十九番の表記方法を見ると、助詞・助動詞を除き、おおよそ正訓による方法が採られている。とすれば、「流」における「流る」という本来の意味を重視して、「ながらふる」を解釈するのが順当な見方であろう。

前に挙げた卷十の七夕の歌 q が想起される。

…いつしかと我が待つ今夜 この川の流れの長く
ありこせぬかも

「この川の流れの長く」は、金村の歌で見た「自妻と頼める今夜 秋の夜の百夜の長さありこせぬかも」、また、p の「妹に逢へる夜は今し七夜を継ぎこせぬかも」のそれぞれの傍線部分に相当する箇所と考えられる。即ち、夜が数夜継続するほど長く続くということを、川が絶えず長く流れるという表現で譬えたものと思われる。

また、卷六には、「岩走り激ち流るる泊瀬川絶ゆることなくまたも来て見む」（雑歌・紀朝臣鹿人・九九一）という歌が見られる。「…泊瀬川をその絶えることがないように長くまた来て見よう」と解釈されているよ

うに、萬葉歌人は、川の流れを、尽きることのない、いつまでも長く続くものとして捉えていたと見られる^(六二)。そもそも、長く連綿と続くものを川の流れに譬えるという方法は、萬葉歌人の独創的な発想ではなさそうである。こうした方法は漢詩などにも窺える。

例えば、『文選』(梁・昭明太子)の樂府には、「日中市朝滿 車馬若川流^(六三)」(日中には市朝に滿ち、車馬は川流の若し。)(宋・鮑明遠「結客少年場行」)と見える。日盛りの時刻には市は群集で滿ち溢れ、車馬の通行は、川の流れのように、絶え間なく連なり続いているという。なお、『玉臺新詠』(梁・徐陵)には、「思君如流水^(六四) 何有窮已時^(六五)」(君を思うて流水の如し、何ぞ窮り已む時^(六六)らん。)と詠んだ詩(後漢・徐幹「室思一首」その三)が収められている。この詩は、遠方の夫を思いやる妻の情を詠んだものであるが、その妻の悲嘆に暮れる想いは、流れる水のようにいつ尽きるとも知れないほど長く続くものとして表されている。

作者蒼謝女王は、五十九番の「夜」の継続性を、二〇九二(q)、また、右の漢詩にも描かれているように、絶え間なく流れ続けるという「川流」のようなものとして捉えていたのかも知れない。そして、作者、もしくは編者は、そうした夜の「流れ続ける」性格を表すのに相応しい「流経」という表記を用いたとも考えられるであ

ろう。

前にも述べたように、蒼謝女王は、持統天皇が太上天皇であつた頃——即ち、文武天皇在位中——に活動した歌人と見なされている。持統天皇自身の歌に漢籍からの受容が見られることは、既に指摘されている^(六七)。また、文武天皇は、和歌に限らず漢詩も詠じており、『懷風藻』には、その詩が三首撰入されている。なお、持統天皇の行幸に供奉し且つ宮廷歌人として活躍した柿本人麻呂の歌にも、漢詩的な匂いを漂わせる表現が見出せるのである^(六八)。とすれば、蒼謝女王も、この持統・文武両朝時代の歌壇に携わった一人と見なした場合、自己の歌に、漢籍に基づく発想・表現方法を導入した可能性は認められるであろう^(六九)。

現に、五十九番の三句目には、「寒夜」という漢語に由来する表現が用いられており、また、結句には「独香宿良武」と見え、漢詩などに見られる「独宿」を思わせる表記である。前に挙げた^(七〇)、m、nなどが、五十九番と類似点の多い例であることは既に述べたが、その類似は用字法にまで及んでいる。例えば、m(反歌・三二八二)には、「寒夜」が用いられており、また、nの結句は「我独宿牟^(七一)」と表記されているのである。

漢詩において男女の別離を主題とした類と言えば、まず、六朝時代に数多く詠まれた閨情の詩を思い浮かべるであろう。閨情の詩とは、作者が、夫に旅立たれた妻に代わって、独りで空閨を守り続けるというその心境を詠んだものである。六朝の漢詩における主要な類型の一つと称しても過言ではないだろう。その一、二例を見てみたい。

次の詩は、『文選』の「古詩十九首」の第十六首目として収められている。寒々とした中で、留守居の妻は独り寝の長い夜を重ねつつ、遠方の夫に想いを寄せる。

凛凛歲云暮
蟪蛄夕鳴悲
涼風率已厲
遊子寒無衣
錦衾遺洛浦
同袍與我違
獨宿累長夜
夢想見容輝
良人惟古懼
枉駕惠前綏

凛凛として歳云に暮れ、
蟪蛄夕に鳴き悲しむ。
涼風率かに已に厲しく、
遊子寒くして衣無し。
錦衾洛浦に遺し、
同袍我と違へり。
獨り宿して長夜を累ね、
夢に想うて容輝を見る。
良人古懼を惟ひ、
駕を枉げて前綏を恵む。

願得^{ねが}常巧笑^{じょうくわうせう}
携手^{てあ}同^{どう}車歸^{くるまかへ}
既來不^{すで}須臾^{しゆゐ}
又不^{また}處^{ちよ}重闌^{じやうらん}
願はくは常に巧笑を得んと、
手を携へ車を同じうして歸る。
既に來りて須臾ならず、
又重闌に處らず。

(後略)

烈風が吹き付ける中で、留守居の妻は遠方の夫の身の上を案じつつ、独り寝の長々しい夜を何夜も重ねる。そうしたある夜に、夢の中で、夫の姿を見、かつての晴れがましい新婚の思い出を語りかける。しかし、やがて夢は途切れ、妻は夫のいない現実につれ戻される。『萬葉集』のmでも、妻は夢想到頼り、現実には夫と逢えない憂いを晴らそうとする。そして、右の詩の如何にも厳しい冬の情景は、五十九番をはじめ、mの長歌、同じく反歌(三二八二)、またnにも窺われるものである。更に、右の詩の「獨宿」は、前にも述べたように、五十九番及びnに用いられている用字法である(六六)。

なお、『藝文類聚』人部・閨情の条には、次の梁の邵陵王綸の閨怨詩が見られる。「蕩子從遊宦」思妾守^{しやう}房^{ぼう}櫳^{かう}「塵鏡朝朝掩寒牀」夜夜空……(蕩子遊宦に從ひ、思妾房櫳を守る。塵鏡朝朝掩ひ、寒牀夜夜空し。(六六))
「夫は赴任したきり帰らず、物思いに耽る私は部屋の子窓の中で夫の留守を守る。(長い月日が経ったせいで)ほこりまみれになった鏡に、毎朝覆いを掛け、寒々とし

た寢床は、毎晩虚ろのままである。」と妻は嘆く。

右に述べた二首は、『文選』、『藝文類聚』ばかりでなく、『玉臺新詠』にも収められている。『玉臺新詠』は、当時流行していた艶麗な詩を主として収めた詩集^(六)であるだけに、男女の情を濃厚に示している右のような閨情の詩が多く見られるのであろう。その卷八の雜詩には、『不堪寒夜久^(七)夜守空牀^(八)堪^(九)へず寒夜の久しくして、夜夜空牀を守るに。』(梁・劉綏「冬宵」)と詠まれている詩が見られ、先に挙げた邵陵王綸の表現方法と類似している^(六九)。「寒夜」という漢語もまた、この劉綏の詩に現れているのである。

なお言え、邵陵王綸の詩に見える「思妾」もその一例であるが、女性の立場から詠まれている閨情の詩などでは、夫をさす「君」「子」に對して、「妾」が女性の第一人称として用いられている場合が多い。前にも述べたが、『萬葉集』では、これとは反對に「妾」の用例が「我」「吾」などに比して圧倒的に少ない(注(一七)参照)。しかしながら、その僅か数例しかない「妾」が使われている歌の中には、m(「妾背子^(一〇)は」、注(一一)参照)が見られ、また、挽歌ではあるが、1と類似の多い三三二九(注(四九)参照)もその一例として見られるのである。閨情の詩を題材にしたと考えられるこれらの歌に、「妾」が用いられていることは偶然とは思えない。

い。五十九番の場合においても、内容、表現、共に右に挙げた閨情の詩と共通していることを重視すれば、五十九番の原文は本来「妾^(一一)」であつたと見なすべきかも知れない。

無論、以上挙げた閨情の詩と比較した上で、五十九番、1、m、nなどに類似点があるとは言え、これらの歌人が、じかにその詩を見て歌を詠じたという確証はない。直接の典拠を挙げるのが困難であるということは、詩歌の比較文学における一つの限界として認めざるを得ないわけである^(七〇)。しかし、享受者——ここでは萬葉歌人——が、漢詩からなる文学知識を地盤にして作歌に臨んだという態度には意義があり、我々読者にとつて、そうした作歌態度を認識した上で、それらの歌人の歌を理解することがむしろ重要ではないだろうか。

六

本稿第二節で、定家や成実に詠まれた「つま吹く風」の歌(g、k)に関して、「ながらふる」が詠み込まれていないということを述べた。五十九番を本歌取りしたこれらの例では、「ながらふる」という表現は脱落し、本歌の「つま吹く風」のみが採用されたかのように見えた。しかし、五十九番の「ながらふる」+「夜」に

示されている意味は、決してこれらの例から消え失せていたのではない。

g 寒夜千鳥

浦千鳥かたもさだめずこひて鳴くつま吹く風の夜ぞ
ひさしき

k 旅ごろもつま吹く風の寒き夜に袖をりかへし幾夜か
もねん

確かに、「ながらふ」という語は用いられていない。しかしながら、定家と成実が「夜ぞひさしき」「幾夜」を詠み込んでいるということは、本歌の「ながらふる」が「夜」に掛かり、その継続性を表していることを、既に認識していたということの裏付けになるのではないだろうか。

そして、なぜ、この二首には、本歌とは違う「つま」の用法が用いられたのであろうか。少なくとも二通りの説明が可能であろう。まず、その一は、当該歌の原文がもともと「妻」であったことを前提に考える場合である。定家と成実は当初より、五十九番の「妻」を、文字通り「我が背の君」の配偶者をさす語として捉えていたとする。そこで、五十九番を踏まえながらも、新たな趣向を凝らすために、「つま」の同音異義語性に着目して、本歌の用法を、千鳥の呼び交わす「つま」に変化させたり、また、「旅ごろも」、「袖」などと縁語関係に位置づけた

りしたのではないかと考えられる。あるいは、その二として、当該歌の原文は本来「妾」であったものを、後に「妻」と誤写され、定家と成実が目にした資料は、いずれも「妻」を伝えるものであったことを前提に考える場合である。第一人称としては、元の「妾」とあれば、何の問題もなかるうが、「妻」とあるのに対して、定家と成実は何らかの違和感を抱いたと見る。そのために、右に述べた「つま」の他の用法をそれぞれの歌に用いたと考え得る。どちらの説明がより蓋然性の高いものであるかは、現段階では定めがたいとしか言えないだろう。いずれにせよ、定家と成実が、本歌の「ながらふる」を「妻」から切り離し、「夜」に掛かるものとして解釈していたことには変わりはない。「夜ぞひさしき」、「幾夜かもねん」は自ずと、それらを詠み込んだ作者の五十九番に対する理解を浮き彫りにしているのである。

おわりに

『萬葉集』巻一・五十九番の解釈は、従来より様々な試みられながらも、今日に至っても定説を見ない。

本稿では、初句の「ながらふる」は第三句目の「夜」に掛かるものとして、その夜が幾夜も長く継続する状態を表しているのではないかと考察してきた次第である。

現に、別離している男女にとつて独夜の何日も何夜も長く続くという捉え方は、『萬葉集』の他の歌にも窺われ、更に、五十九番を本歌取りした歌にまで見受けられるものとして確認され得る。

のみならず、六朝時代に数多く詠まれた閨情の詩の中でも、長い別離に渡つて、独り寝の夜が幾夜も重なり継続するという状況が描かれている。誉謝女王が、こうした詩の発想・表現方法からなる文学知識を踏まえた上で、五十九番を詠じたと認められるならば、一首は新たな意義を持たされることとなる。また、作者の漢詩文に学んだという姿勢を認識することによつて、五十九番に対する我々読者の理解も鑑賞も高められる方向にすら導かれ得る。定家の歌の歌題を再見すると、ここにも「寒夜」という表現が用いられている。その上、歌に詠まれている「夜ぞひさしき」の表現は、まさしく劉緩の「不堪寒夜久」を彷彿させるものである。やはり、漢籍との係わりを検討せずに五十九番の解釈を試みるわけには行かないように思う。

卑見ながら、以上今回の考察結果を論じた上で、当該歌を次のように解釈することを提案してみたいと思う。

幾夜も長く続く、妻に吹く風の寒い夜に、我が夫は独りて寝ているのであろうか。

右のように解せば、作者の心境、そして如何なる文学知

識を踏まえながら一首を詠んだかを、より精密に捉えることが可能となるのではないだろうか。

(注)

特に断らない限り、本稿における詩歌の引用は次のものによつた。なお、引用文における傍線、傍点、括弧内は稿者による。

『萬葉集』―日本古典文学全集(小学館、昭和四十六、五十年)。

『古今和歌集』、『後撰和歌集』及び『後拾遺和歌集』―

新日本古典文学大系(岩波書店、一九八九年、一九九〇年及び一九九四年)。

『うつほ物語』―『宇津保物語本文と索引 本文編』(笠間書院、昭和四十八年)。

『実国集』及び『宝治百首』―新編国歌大観(角川書店、昭和六十一年)。

『拾遺愚草』、『夫木和歌抄』及び『続千載和歌集』―校註国歌大系(講談社、昭和五十一年)。

『百人一首』―島津忠夫訳注『新版 百人一首』(角川文庫、昭和四十四年)。

『万代和歌集』―和歌文学大系(明治書院、平成十年)。

『文選』及び『玉臺新詠』―新釈漢文大系(明治書院、昭和三十九年及び昭和四十九、五十年)。

(一) 五十九番は通常、巻一・五十七〜六十一番の歌群に

属するものとされ、その五十七番の前に、「二年壬寅、

太上天皇、参河国に幸す時の歌」という題詞が設け

られている。太上天皇とは持統天皇のことであり、『統

日本紀』の文武天皇大宝二年の条に、持統天皇が太上天

皇として、その年の十月十日に三河に行幸し、尾張、美

濃、伊勢、そして伊賀を廻ったという記事が見られる。

(二) 誉謝女王の伝に関しては、詳細な資料は遺されていない。『続日本紀』文武天皇慶雲三年六月の条に、「丙申、

從四位下与射女王卒」と見えるのみである。「与射」(與

射)は、『萬葉集』の表記とは異なるが、『萬葉集』の諸

本のうち、元暦校本、類聚古集、紀州本、廣瀬本などに

は、「舉」と見え、その中で、元暦校本は「舉」の右に、

朱で「譽」と訂正している。こうした誤写と思われるもの

のよって、当該歌の作者名の異同は古くから存在してい

たと想像される。五十九番の作者誉謝女王と『続日本

紀』に見える与射女王の活動時期がほぼ一致しているこ

とを考え合わせれば、通説通り同一人物と見なせよう。

とすれば、当該歌は作者没年の約四年前に詠じられたこ

となる。

(三) 五十九番の詠まれた背景に関しては、史実としては、

持統天皇の大宝二年の行幸と係わりがあるということ以外

には明らかでない。第四句目の「我が背の君」が實際

誰を指すのかは不明である。なお、作者誉謝女王自身が

行幸に従駕していたのか、それとも夫であったのかとい

う点も定かでない。諸注釈書の間で意見が分かれている

ところではあるが、いずれにしても、五十九番が男女間の

別離をその主旨にしていることには変わりはない。

(四) 反歌は省く。

(五) 「フ」に関しては、『時代別』が説くように、接尾語

とする説もあるが、上代における「フ」は、多くの動詞

に自由に付く傾向が顕著なために、助動詞に分類する見

方もある(角川古語大辞典)。『萬葉集』の「ながらふ」

を対象とする本稿では、後者の助動詞説に従うこととす

る。

(六) 他の古語辞典類では、②の用法については、更に幾

つかの小項目を設けて細分化している場合もある。例え

ば、岩波古語辞典は、「長い時間にわたつてものごとが

経過し、継続して行く意。」と説明した上で、更に「①

長い間経て行く。伝わる。…②長い間つづく。…③世の

中を生きて渡る。…」と、細かく分けている。また、岩

波は、この「ながらふ」(長らふ)を下二段活用とし、

四段活用で「つづけて流れる。」と定義している「なが

らふ」(流らふ)、『時代別』の言う①とは別語であると

見なしている。とは言え、この岩波も含めて、管見に入

った古語辞典類は、おおよそ『時代別』の如く、動詞

「ながらふ」を、花・雪などといった物が流れるように降り続けるという用法と、時間が経過することと関連して、人命、言い伝えなどが長つづきするという用法に分けて扱っている。

ただ、『時代別』は「ながらふ」における継続・反復を表す「フ」の存在を指摘してはいるが、①の用法に関しては、その働きを明白にしていない。他の辞典類で、「流れ続ける。続けて空を流れ行く。多く落花にいう。」（角川古語大辞典）、「つづけて流れる」（岩波古語辞典）、「流れ続ける。流れるように降り続ける。」（旺文社古語辞典）と説明されている如く、やはり、『時代別』の①は、「雨・風・花などが降り落ち続ける」とでもあるべきではないだろうか。本稿においては、そのように解することとしたい。

(七)『萬葉集』巻八の作品の類例が巻十に多く見られるという点に関しては、日本古典文学全集『萬葉集二』の「解説」に指摘が見られる。

(八)天平五年（七三三）〜天平宝字三年（七五九）を指す。澤瀉久孝・森本治吉著『作者類別年代順萬葉集』（勉誠社、昭和五十九年）。

(九)『時代別国語大辞典 上代編』。

(一〇)宗祇『萬葉抄』、『萬葉集叢書』第十輯所収（古今書院、昭和三年）二〇〇頁。

(一一)武田祐吉『萬葉集全註釋一』（改造社、昭和二十三年）二七八〜二八〇頁。

(一二)日本古典文学大系『萬葉集一』（岩波書店、昭和三十二年、四〇頁）にも、「君の帰りを待つて空虚な日々を送っている妻（である私）を吹く風の寒いこの夜に、背の君はやはり一人淋しくおやすみであろうか」という類似した解釈が見られる。

(一三)澤瀉久孝『萬葉集注釋 卷第一』（中央公論社、昭和三十二年）三七八〜三八二頁。

(一四)なお、『万代和歌集』には、「筑波嶺のそがひに立てるさを鹿のつま吹く風に声も惜しまず」（秋歌下・九条道家・一〇七三）といった例が見え、『宝治百首』には、「はまびさしつま吹く風に恨みわびしほひのかたに千鳥鳴くなり」（鴻千鳥・道助法親王・二三一九）の歌が収められている。

更に、同じ『宝治百首』には、藤原成実の「旅ごろもつま吹く風の寒き夜に袖をりかへし幾夜かもねん」（旅宿・三八一六）が見られるのである。この成実の歌に関しては、後の②衣説のところで述べることにする。

(一五)『萬葉集』巻六に見える「白鶴の妻呼ぶ声」（雑歌・一〇六四）、また、巻二十の「妻呼ぶ雄鹿」（四三一九）等々を例として挙げられる。

(一六)新日本古典文学大系『萬葉集一』（岩波書店、一

九九九年）六七頁。

（一七）「神奈備の浅篠原の愛しみ妾思ふ君が声の著けく」（卷十一・問答歌・二七七四）、「…天雲の下なる人は妾のみかも君に恋ふらむ…妾恋ぞ日に異に増さる…」（卷十三・挽歌・三三二九）の例にも「妾」が見え、

なお、夫を親しんで呼ぶ時の「わが背子」にも、「妾」は用いられている。「妾背子は待てど来まらず…」（卷十三・相聞歌・三二八〇）。ただし、『萬葉集』では、第一人称「われ」（「あれ」）、「わ」（「あ」）などに関しては、仮名書きの例を除き、「我」または「吾」と表記されている例が圧倒的に多く、「妾」の例は以上挙げた歌を含め、計十例（歌に七例、題詞に三例）に過ぎない。

（一八）澤瀉久孝『萬葉集注釋 卷第九』八九頁参照。

（一九）誤字説に関しては、一七二七の「妻」と「妾」（右注参照）のように、現存する諸本の間で明らかな異同が見られる場合には、その誤写の蓋然性はより高いものと見なせよう。しかし、五十九番の「妻」の場合は、現存する諸本の間では異同は見られないものの、誤字説が可能とされてきた論拠としては、現存する萬葉資料以前では、本文が紛れやすい草書体で書かれていたことを前提に考えられてきたことが挙げられる。即ち、五十九番に関して言えば、草書体で書かれていたと推測される「妾」が、「妻」と似ていたために、写されて行くうちに誤写

が生じたというわけである。従って、現存する『萬葉集』の諸本に多く見られる楷書体（またはそれに近い字体）の「妻」と「妾」の文字例が似ていても似ていなくとも問題外と考えられるわけである。（『座談会』『読まれし』『萬葉集』、『文学季刊』、第十卷第四号、九九九年十月、一三〇—一四頁参照。）ただし、五十九番は、鎌倉後期の『夫木和歌抄』（卷第三十六・戀）には、「ながらふるつま吹く風の寒き夜にわがせの君は一人かぬらむ」と、旧訓のまま載せられている上に、先述した如く、「つま吹く風」はそれ以前に、定家の歌に既に詠み込まれており、その後、他の歌人にも踏襲された表現である。一方、「われ吹く風」と詠んだ例は見られないようである。本来「妾」とあったのが現存の萬葉資料において、「妻」と誤られているのだとすれば、元の「妾」に拠った「われ吹く風」という表現が後代の和歌に詠み込まれていても良さそうである。

（二〇）澤瀉久孝・森本治吉『作者類別年代順萬葉集』。

（二一）この歌は、『小町集』にも収められており、なお、小異はあるが、『後撰和歌集』の卷十七・雑三に、作者名「土左」として重出している。

（二二）新日本古典文学大系『古今和歌集』二四八頁。

（二三）下河邊長流『萬葉集管見』第一卷、『萬葉集叢書』

第六輯所収（古今書院、大正十四年）一六頁。

- (二四)『論語』郷党篇に、「君子不_レ以_二紺緞_一飾_レ。紅紫不以_二爲_レ褻服_一。當_レ暑袷絺綌、必表而出_レ之。緇衣羔裘。素衣麤裘。黃衣狐裘。褻裘長、短_二右袂_一。必有_二寢衣_一、長一身有半。…」とあるのによる。当該箇所については、「必ず夜着を用意する。その長さは身長の一俵半である。」と訳される(中国古典文学大系第三卷、平凡社、昭和四十五年)。こうした、春秋時代における服装の礼法を述べた記述は、参考にはできるかも知れないが、「ながらふるつま」を説明する論証にはなり得ないだろう。
- (二五)契沖『萬葉代匠記』、『契沖全集』第一卷所収(岩波書店、一九七三年)三七六頁。
- (二六)賀茂真淵『萬葉集考』、『賀茂真淵全集』第三所収(弘文館、明治三十七年)二二五九頁。
- (二七)加藤千蔭は、『萬葉集略解』(國民文庫刊行會、明治四十三年、上巻、四九頁)に、「ながらふるは長ら經るにて、寢衣のすその長さをいふ。つまは衣の端也(中略)と翁(真淵を指す)いはれき。されど衣といはずして、たゞちにつまとつゞくべきにあらず。」と述べている。
- (二八)荒木田久老『萬葉考概落葉』、『萬葉集叢書』第四輯所収(古今書院、大正十三年)二二頁。
- (二九)この歌は『伊勢物語』九段にも見られる。
- (三〇)『萬葉集』には、衣の棲をいう「つま」を詠んだ

確例は見出せないが、『日本書紀』の歌謡に見えるまかりのおほのみこ勾大兄皇子(安閑天皇)の御製には、「足取りあしどり端取りつまどりして枕取りまくらどり端取りつまどりして(原文「都麼怒喇」)の対句が見られる。『古代歌謡集』(日本古典文学大系、岩波書店、昭和三十三年、一八八―一八九頁)の頭注によれば、「端取りつまどり」とは、「着物の端を取って引っぱる意か」と考え得る。従って、衣の棲の意に解釈できる例としては、業平の歌に先立つものと見なすことができるかも知れない。

- (三一)また、『続千載和歌集』の「君こずば誰とかさねむから衣つま吹く風に夜は更けにけり」(恋歌三・修理大夫隆康)にあるように、「から衣つま吹く風」を詠み込んだ歌も見られる。
- (三二)例えば、業平の歌では、「きつゝ」に「着つゝ」と「来つゝ」、「なれ」に「褻れ」と「馴れ」、「つま」に「棲」と「妻」が掛けられており、「唐衣」はその「着つゝ」「褻れ」「棲」と縁語関係にある(新日本古典文学大系『古今和歌集』、その他)。
- (三三)中西進『万葉集 全訳注原文付(一)』(講談社文庫、一九七八年)七八―七九頁。
- (三四)「妻」が「雪」の誤字として生じたという可能性については、菊池壽人氏が、「げに」「妻」も「雪」も横画の多い文字であるから、紛れぬとも限らない(『萬葉

集精考』、中興館、昭和十年、二五七頁）と述べているように、「雪」と「妻」は似ていなくはない。現存しない萬葉資料に、「雪」がある程度崩した字体で書かれていたと想定した場合、そうした資料を書写する際に「妻」と誤って写した可能性が全くないとは言えないだろう。注（一九）を参照されたい。

（三五）久老は次のように述べている。「古へ衣に、裾袖襟などは、歌にもよみたれど、妻^{（メツ）}をよめる事なし。決して雪の誤なるべくおもひて、私に改つ。』『萬葉考槻落葉』、『萬葉集叢書』第四輯所収、二一頁。

（三六）注（一六）に同じ。

（三七）「雪吹く風」という表現は、『萬葉集』には例を見ない。ただし、類似した表現は漢詩には用いられている。例えば、宋の鮑明遠の「學劉公幹體二」（『文選』雜擬下）に、「胡風吹朔雪^{（朔雪）}千里度龍山^{（龍山）}」（胡風は朔雪を吹き、千里龍山を度る。）と見え、えびすからの風が朔雪（北方の雪）を吹き付け、千里の彼方から龍山を越えてくることを描いた箇所である。しかし、たとえ、こうした表現が和語化し、「雪吹く風」という形で詠み込まれたと想定しても、「ながらふる」との関係をどう解釈すれば良いかということがやはり問題として残る。

雪説に従った諸注釈書では、「ながらふる」を「流る」と関連付け、「我が園に梅の花散るひさかたの天より雪

の流れ来るかも」（巻五・雜歌・大伴旅人・八二二）、「巻向の檜原もいまだ雲居ねば小松が末ゆ沫雪流る」（巻十・冬雜歌・二三一四）などを例として挙げている。しかし、これらの歌には、風に関する語句は一切詠み込まれていない。即ち、「雪」を「流れる」という意味で「ながらふ」と表現する可能性、また、「吹く風」と描写する可能性も、それぞれ認められるであろうが、③雪説の説くように、一首の中で、「雪」を「ながらふ」で修飾して、同時に「吹く風」という表現で描写するのは効果的とは思えない。

（三八）注（二八）に同じ。

（三九）鹿持雅澄『萬葉集古義（二）』（名著刊行會、昭和三年）四七頁。

（四〇）注（一三）に同じ。

（四一）菊池壽人『萬葉集精考』二五七頁。

（四二）岸本由豆流『萬葉集攷證』、『萬葉集叢書』第五輯所収（古今書院、大正十三年）二〇一頁。

（四三）同右。

（四四）山田孝雄『萬葉集講義』第一卷（寶文館、昭和三年）二七五〜二七七頁。

（四五）風の動きを「流」で表現するのは、しばしば漢詩に見出せる方法である。「哀風中夜流 孤獸更我前」（哀風は中夜に流れ、孤獸は我が前を更。）（晋・陸士

衡「赴洛道中作二首」その一・『文選』行旅上」をその一例として挙げられる。なお、平安末期に活躍した藤原実国は、「色ふかききみが心の花ちりてみにしむかぜのながれとぞみし」(『実国集』・五七)と詠んでいるが、こうした表現方法は萬葉歌人には行われなかったようである。

(四六)「風」の動きを「ながらふ」「吹く」という二つの要素で描写することが不要であるという点は、③雪説でも見た(注(三七))。なお、風説のもう一つの難点は、「妻」の解釈に関する問題である。風説を主張した『萬葉集攷證』、そしてそれに従った『萬葉集精考』と『萬葉集講義』は、「妻」については、②衣説と同様に、衣の袂の意に解している。ところが、そう見なした場合、前にも述べたように、「衣」などの意味を補わずには、五十九番の「妻」を衣の袂の意に解するのは難しいという問題がここでも問われかねない。現に、風説を採った他の注釈書を見ると、「妻」の解釈は異なっている。新潮日本古典集成は、建物の切り妻という意味に解している。また、日本古典文学全集は、愛媛県周桑郡地方の方言では、つむじ風を意味する「つまかぜ」という語が使われていることを指摘し、「流れ行くつむじ風吹く寒い夜に…」と、民俗学的な立場から解釈している。

(四七)「らむ」について、古語辞典類では、主として現

在の事象・事態についての推量を表す助動詞として扱うのが通常であるが、『時代別国語大辞典 上代編』は、「(前略)想定され得る一つの事態を推測する意をあらわす。実際の文脈においては、しばしば現在の事実と結びつけて考えやすいところから、現在の推量と説かれることもあるが、本来、そういう時の観念はふくまれていない。」と説明している。

(四八)なお、「ぬばたまの妹が黒髪今夜もか我がなき床になびけて寝らむ」(卷十一・二五六四)においても、夫が、妻の独り寝を想像する時間的範囲は当夜に限らず、「昨夜も、一昨夜も、もしやそれまでに幾夜も独りで寝ていたのではなかるうか」という余情を漂わせている点、三五〇五と同様である。そして、「河内の大橋を独り行く娘子を見る」と題する卷九・一七四二番「…さ丹塗りの大橋の上ゆ 紅の 赤裳裾引き 山藍もち 摺れる衣着て ただひとりい渡らす児は 若草の 夫かあるらむ 櫛の実の ひとりか寝らむ…」の傍線で示した対句には、「今頃」「今日」などといった現在とは結び付けにくい「らむ」が見られる。日本古典文学全集は、「ひとりか寝らむーラムは現在推量だが、こゝは、習慣的現在についていう。」と説明している。無論、数週間程度の別離を主題とした五十九番における「らむ」が、「習慣的現在」の推量を表していると言うわけではない。ただ、い

わゆる現在推量「らむ」の説明では解釈しきれない右の一七四二のような例も実在するということに注目したい。そう考えれば、五十九番の「らむ」にも、通常の現在推量「らむ」に窺えない現象が見受けられるのではないかと考慮する余地は充分あるように思う。

(四九) この三二七四(一)は、次に挙げる巻十三の挽歌として収められている三三二九の後半の部分とほぼ重なっている。なお、注(一七)でも述べたように、三三二九は、「妾」字が用いられている例でもある。

白雲のたなびく国の青雲の向伏す国の天雲の下なる人は妾のみかも君に恋ふらむ我のみかも君に恋ふれば天地に言を足らはし恋ふれかも胸の病みたる思へかも心の痛み妾恋ぞ日に異に増さる……せむすべのたどきを知らに岩が根のこしき道の石床の根延へる門に朝には出で居て嘆き夕には入り居恋ひつつぬばたまの黒髪敷きて人の寝る甘睡は寝ずに大舟のゆくらくらに思ひつつ我が寝る夜は数みもあへぬかも

(五〇) 日本古典文学全集『萬葉集三』四〇〇頁。

(五一) 結句「天の足り夜を」の原文は、元暦校本萬葉集、類聚古集などによれば「天之足夜乎」とあるが、西本願寺本萬葉集、紀州本萬葉集などには、「乎」(ヲ)でなく「于」(ニ)とある。この三二八〇(m)の異伝として

見える三二八一には、結句は「天の足り夜に」(天之足夜尔)とある。

(五二) 注(五〇)に同じ(四〇三頁)。なお、近年の注釈書の多くは、「足り夜」における「足り具わった夜」という意味を重視し、結句「天の足り夜を」を、「この良い夜であるのに」(全註釋)、「この良い晩であるものを」(註釋)、「まことに満ち足りた今夜なもの」(集成)などのように解し、「天の足」を、「夜」を讃美する語句として捉えている。しかし、「我が背子は待てど来まさず：ぬばたまの夜もふけにけりさ夜ふけてあらしの吹けば立ち待てる我が衣手に降る雪は凍り渡りぬ」と詠まれているように、妻は当夜の孤独さ、そしてその厳しい寒さに対して悲観的な態度を示している。そうした妻の絶望的な想いは、一本の糸のように一首を貫いていると言えるであろう。そこで、結句を以て「この良い夜であるのに」「まことに満ち足りた今夜なもの」などのと解釈するのは、そうした妻の悲観的な態度を不意に一変してしまうもののように思わざるを得ない。よって、全集の「幾夜も続けて」という解釈が最も妥当と思われる、これに従うこととした。

(五三) 文武天皇をさす。大行天皇とは、崩御して諡を奉られた前の天皇のことであり、『萬葉集』における大行天皇は、文武天皇一人である。日本古典文学全集『萬

葉集一』九九頁頭注参照。

(五四)『続日本紀』大宝元年二月の条(「癸亥、行幸吉野離宮」)及び大宝二年七月の条(「丙子、天皇幸吉野離宮」)に、文武天皇の吉野行幸に関する記事が見られる。

(五五)他にも、「印南野の浅茅押し並べさ寝る夜の日長くしあれば家し偲はゆ」(巻六・雑歌・山部赤人・九四〇)、「旅の夜の久しくなればさにつらふ紐解き放けず恋ふるこのころ」(巻十二・三一四四)といった歌が見られ、例は少なくない。

(五六)反歌は省く。

(五七)これら①妻説、②衣説(中西氏解釈)、そして⑤妾説に限らず、③雪説でも、「絶ず引つゞきて、長に零ことなり」(『萬葉集古義』、また、④風説においても、「引き續きて吹く風」(『萬葉集講義』)という解釈が見られる。即ち、①く⑤の諸説のいずれにおいても、「ながらふる」は、時間の経過することに関連して、物事の継続性を表す表現として扱われる傾向が見られるわけである。

(五八)ここでは、「ながらふる」の「ふる」に、「古る」(古びた袖)、また、「降る」(比喩的にいう降る涙)が掛けられていると見なせる。

(五九)注(五)参照。

(六〇)「この川の流れの長く」の表現については、日本古典文学全集は、「長く続くもののたとえに天の川をとり上げた」と述べている。作者の眼前に、壮大な天の川が果てしなく流れている情景を連想させ、如何にも七夕の歌に相応しい表現と言えるであろう。

「流れ」の原文は、「行」とあり、諸本には「ユキ」「ユキテ」という旧訓が見られ、また、「ユクゴト」(『萬葉代匠記』(精撰本))、「ユクラユクラニ」(『萬葉集考』)といった、脱字または誤字を推測した説による訓も提案され、従来より種々の訓み方がなされてきた。大系、全集、集成などがこれらとは違い、「ながれ」の訓を可能と見なしたのは、『類聚名義抄』に、「行、ナカル」と見えるのによる。いずれにせよ、「行」が川の流動を意味していることには違いない。現に、「ユキテ」「ユクゴト」の訓に従った注釈書を見ても(例、「この天の川の流の長いやうに…」(『萬葉集注釋』)、「天の川の流れて未長いごとくに…」(『万葉集全訳注原文付』))、やはり川の流れと解釈している。

(六一)日本古典文学全集『萬葉集二』一六三―一六四頁。

(六二)なお、巻七の「巻向の痛足の川ゆ行く水の絶ゆることなくまたかへり見む」(雑歌・一一〇〇)、そして巻十八の「…もののふの八十伴の緒も己が負へる己が名負ひて大君の任けのまにまにこの川の絶ゆること

なくこの山の いや継ぎ継ぎにかくしこそ 仕へ奉らめ
いや遠長に」(大伴家持・四〇九八)にも九九一と類似
した表現が窺われる。

(六三) 小島憲之「萬葉集と中國文學との交流——その概
観——」、「『上代日本文學と中國文學中』(塙書房、昭和
三十九年)。

(六四) 同右。

(六五) 誉謝女王を含め、萬葉時代の前期(ここでは、奈
良遷都の七一〇年までを意味する)に活躍した歌人が、
中国の韻文に目を向け、それらの発想・表現方法に学ん
だとすれば、まず、『文選』、『玉臺新詠』、また、類書と
しては『藝文類聚』(初唐・歐陽詢)の詩を、自己の歌
の題材とした可能性が最も高いとされる。小島憲之「万
葉集と漢文學」、「『国文学論叢第四輯 上代文学 研究と資
料』(至文堂、昭和三十六年) 参照。

(六六) 本稿に挙げた例の中で、lやmが、夫を待つ妻の
立場から詠まれていることから見れば、まさしく閨情の
詩と調和する例と言えるであろう。しかし、nのように、
旅する者の立場から独夜の堪え難さを詠んだ例も見られ
る。五十九番の場合は、女性の立場から詠まれているこ
とには違いないが、行幸に供奉していたのは、誉謝女王、
その夫、いずれにも受け取れる(注(三) 参照)。女王
が留守居の妻の立場から、当該歌を詠んだと見なすなら

ば、lやmのように、閨情の詩の設定と類似するものと
なる。しかし、『萬葉集』の歌では、行幸・出征など、
公的な義務を果たすために、故郷を離れざるを得なかつ
たのは男性ばかりでなく、女性も時にはその参加者とし
て登場している。よって、誉謝女王自身が従駕していた
可能性は大いにあり得る。ところで、女王が供奉して、
五十九番を詠んだとなれば、l、m、そして閨情の詩の
設定とは逆になり、また、公の場で活躍したこととなる
女王の女性像は、閨情の詩などに描かれる女性像とは異
なってくる。しかし、そうとは言え、事情が完全に一致
した場合のみに、萬葉人が漢詩に習ってその発想・表現
を受容したとはまず考えられないだろう。むしろ、自己
の歌の事情に釣り合うように、漢詩の類型的な発想・表
現を適宜借用したと考えるのが妥当と思われる。

(六七) 本文・読み下しは、新釈漢文大系『玉台新詠』(梁
・邵陵王綸「代三秋婦閨怨」)によった。

(六八) 新釈漢文大系『文選』の「解説」を参照。

(六九) 他の例を挙げるとすれば、斉の謝朓の「秋夜」に
は、「思_レ君隔_二九重_一 夜夜空佇立」(君を思_{おも}うて九重を隔_は
つ、夜夜空しく佇立す。)と詠まれており、また、魏の
甄皇后の作として伝わる「樂府横上第一首」には、「念_レ
君常苦悲 夜夜不_レ能_レ寐」(君を念_{おも}ひて常に苦悲し、夜夜寐_{やす}
ぬる能はず。)と見える。以上の二首も『玉臺新詠』に収

められている詩である。

(七〇) 小島憲之「万葉集と漢文学」、『国文学論叢第四輯
上代文学 研究と資料』六頁。

(かわかみ しきこ・博士後期課程)